

釧路川かわたびほっかいどうの取組から 更なる「共創」を目指す — 観光立国を先導する地域づくりを目指して —

釧路開発建設部 治水課 ○嵯峨井 聖貴
釧路開発建設部 治水課 後藤 裕二
釧路開発建設部 治水課 稲垣 乃吾

第9期北海道総合開発計画では、「共に北海道の未来を創る（共創）」を中心的メッセージとして、観光立国の先導などの目標達成に向け、多様な主体の連携・協働による一層の取組強化が求められている。

「川へ行こう！川を楽しもう！」釧路開発建設部では、釧路湿原を始めとした雄大な自然フィールドを活用した、様々なアクティビティを組み合わせた「かわたび」の取組を行っていることから、事例と課題を整理し、更なる「共創」の可能性を考察する。

キーワード：かわたびほっかいどう、かわまちづくり、釧路湿原自然再生、地域共創

1. はじめに

釧路川は、北海道東部の太平洋側に位置し、その源を屈斜路カルデラの外輪山に発し、屈斜路湖の南端から流れ出て弟子屈原野を流れ、釧別川、オソベツ川等の支川を合流し、釧路湿原に入り、岩保木地点において新釧路川となり太平洋へ注ぐ、幹川流路延長154km、流域面積2,510km²の一級河川である（図-1）。

下流の釧路湿原は、古くから特別天然記念物であるタンチョウの生息地として知られ、1980年に日本で最初のラムサール条約による国際保護湿原として登録された国内最大の湿原であり、1987年には国立公園に指定された。また、上流の屈斜路湖等は阿寒摩周国立公園に指定されるなど、釧路川流域は、非常に豊かな自然環境に恵まれている。

釧路開発建設部では、釧路川とその周辺の雄大な自然フィールドを活用したカヌー、サイクル等の様々なアクティビティと、河川に関わる活動を組み合わせて地域の活性化や観光振興を図る「かわたびほっかいどう」（以下、「かわたび」）の取組を行ってきた。

こうした中、令和6年3月12日に第9期北海道総合開発計画が閣議決定された。計画では、「共に北海道の未来を創る」を中心的メッセージに据え、「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」を目標の一つとし、「観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくり」、「自然共生社会・循環型社会の形成」等の主要施策を、官民の垣根を越えた「共創」などにより実効性を高めながら展開するとしており、多様な主体の連携・協働による一層の取

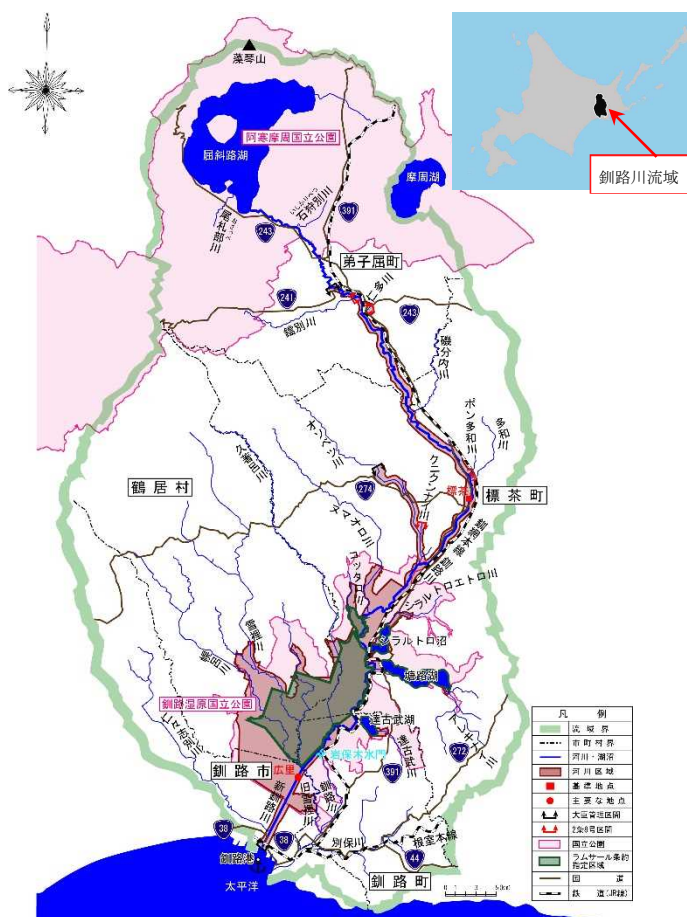


図-1 釧路川流域図

組強化が求められている。

本稿では、釧路開発建設部がこれまで行ってきた「かわたび」の取組事例や課題を整理し、今後の更なる「共創」に向けた可能性と方策を考察する。

2. かわたびほっかいどうの取組

(1) カヌー利用

釧路川は、上流の屈斜路湖から河口まで、堰堤等の横断工作物がない河川であり、上流の源流部は水源の約80%が湧き水で非常に透明度が高く、多様な流れがある一方、下流の湿原部は、川幅が広くゆっくりとした流れの蛇行河川で、周囲には広大な釧路湿原が広がり、タンチョウ、オジロワシといった様々な野鳥やエゾシカなど、多くの野生動物が生息し自然との共存を体験できる空間となっている。こうした他では味わうことのできない環境を求めて、釧路川には多数のカヌー愛好家やカヌー利用を目的とした観光客が訪れる（写真-1）。

釧路開発建設部では、釧路川カヌーネットワーク協会と連携してカヌーポートの設置や安全利用に向けた現地調査を行うなど、カヌーの適正利用に向けた取組を行っているほか、現地調査の結果を踏まえたカヌーガイドラインの作成・配布に協力し、河川の安全利用、マナー、ルール等の啓発も行っている。

更なる観光地域づくりの推進にあたっては、2つの国立公園（阿寒・摩周、釧路湿原）をつなぐアドベンチャートラベルによる取組効果が期待される。

(2) かわたび×うまたび

「かわたび×うまたび」の取組は、馬を核とした地域づくりを目指す標茶町と民間事業者が連携した「道東ホースタウンプロジェクト」と¹⁾、釧路川流域市町村との官民連携によるホーストレッキングを軸とした観光ツアーである。釧路川、釧路湿原の全流域を対象として、これまでにない魅力の創出、流域全体の観光振興を目的に、北海道に古くから伝わる日本在来馬である「どさんこ」によるホーストレッキングと、カヌー、サイクリング、鉄道（JR釧網線・湿原ノロッコ号）などを組み合わせたツアーコースを企画している。

釧路開発建設部では、「かわたび」と連携した取組として、令和3年度から、河川空間を活用したホーストレッキング、サイクリングの後、カヌーで釧路川を下るテストツアーを実施し、令和6年度には、釧路湿原を縦貫



写真-1 釧路川のカヌー利用



写真-2 釧路湿原右岸堤防でのホーストレッキング

する釧路湿原右岸堤防でのホーストレッキング試歩会を実施した。筆者も同試歩会に参加したが、釧路湿原の雄大な自然を「どさんこ」の背に乗ってゆっくりと堪能するという、これまでにない非日常感を味わうことができ、非常に大きな感動を得るとともに、河川空間の更なる有効活用の可能性を秘めた釧路湿原のポテンシャルの高さをまざまざと感じさせられた（写真-2）。

同ツアーはまだテストの段階で、一般客を対象には行われていないが、釧路湿原右岸堤防でのホーストレッキング実施にあたっては、事業者が釧路湿原と釧路川の歴史や価値といったストーリーや釧路湿原の環境保全、自然再生の取組などを紹介したハンドブックを作成し、ツアー客へ解説するインタープリテーションの実施を想定しており、環境教育とエコツーリズムを融合させた、観光ツアーへの高付加価値化を目指している。釧路湿原国立公園の特別地域・特別保護地区は、車馬乗り入れ規制がされており、隣接する釧路湿原右岸堤防では、湿原環境へ負荷を与えないよう配慮と利用のルールを具体化していく必要があると考える。

(3) サイクルツーリズム

釧路川の水辺利活用を推進するため、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイとの連携による、河川空間を活用したサイクルコースの試走会に取り組んでいる。試走会は、令和2年度からこれまで3回実施しており、下流の釧路市街地と隣接する堤防コースや釧路湿原右岸堤防を中心としたコースなど、毎回違ったコース内容を設定し、サイクルコースの選定を進めている。試走会には、周辺自治体職員や関係官庁の職員からも参加者を募り、サイクルコースの途中にある河川管理施設の説明や自然再生事業の紹介を加えながら実施することで、より釧路開発建設部が行う事業や取組の理解促進を図ることができている（次頁 写真-3）。

また、実施後には参加者からアンケート調査を行い、河川空間を活用した更なるサイクルツーリズムの推進に向けた意見や課題抽出を図っている。令和4年度に実施したアンケート調査では、試走会の満足度について、回



写真-3 サイクルツーリズム



写真-4 釧路湿原川レンジャー学習会

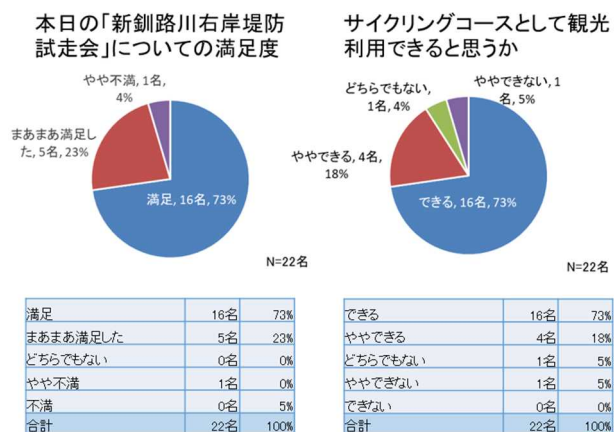


図-2 アンケート調査結果

答者22名のうち16名が「満足」、5名が「まあまあ満足」と回答したほか、サイクリングコースとして観光利用できるかの問いには16名が「できる」と回答（図-2）、河川施設の解説についても18名が「良い」と回答するなど、非常に高い評価を得られた。一方で、あったら良い施設を問う質問には、8名が「トイレや休憩所」と回答したほか、悪かった点については「砂利道やぬかるみが気になったので舗装してほしい」といった意見も上げられた。釧路開発建設部では、サイクルツーリズムを推進するため、河川敷地にサイクルラックを設置するなどの取組を行っているが、関係機関と連携したトイレ設置やコース整備、コースの案内表記、サイクルマップの作成等、サイクルツーリズムに関する取組について検討する余地がある。

(4) ボランティア活動

a) 釧路湿原川レンジャー

「釧路湿原川レンジャー」は、釧路湿原を含む広大な河川空間の持続的な利用と自然再生を推進するため、地域住民が河川管理の一部を担うボランティア活動の取組として、平成12年度に発足した。

主な活動は、日常生活の中で釧路湿原や釧路川に出かけた際に周囲の状況を観察し、気づいたことを事務局（釧路開発建設部治水課）へ連絡してもらうことのほか、釧路湿原の成り立ちや特徴、自然再生の取組などに

ついて学んでもらう学習活動である（写真-4）。釧路川流域に居住し、釧路湿原や釧路川の環境保全活動に参加できる方なら年齢性別問わず応募が可能で、会員数は、平成12年度に51名でスタートした以降、平成14年度には100名を超え、令和6年度は112名が登録し、発足からの延べ人数は2,000人を超える。

「釧路湿原川レンジャー」から届く連絡は、希少な動植物や外来種の目撃情報、ゴミの不法投棄の発見、危険箇所に関する情報など多岐に渡っており、日頃の観察活動等の成果を発表する、観察活動報告会も毎年開催している。「共創」の観点からも、「釧路湿原川レンジャー」自身が日頃の観察活動や活動報告会、学習活動で習得したことを周囲に情報発信するなど、地域における環境保全活動のリーダーとして活躍することが期待されるが、活動の中心となっている会員の高齢化が進んでいることから、若年層への取組継承・世代交代が今後の課題として上げられる。

b) くしろ自然再生解説員

「くしろ自然再生解説員」は、釧路湿原が一望できる細岡展望台において、訪れた観光客へ釧路湿原の自然の魅力や成り立ちなどの概要のほか、自然再生事業に関する紹介・解説を行うボランティアガイドの取組として、平成16年度に発足した（写真-5）。

主な活動は、紙芝居を使用した釧路湿原の紹介、地図による周辺の案内、フィールドスコープから見える野生動物の紹介、記念撮影の手伝い等で、令和6年度は解説員22名が登録し、活動期間である5月から10月の間で31回の解説活動を行い、聴聞者延べ人数は1700人に上った。



写真-5 くしろ自然再生解説員の解説活動

解説を受けた観光客からは、「釧路湿原が綺麗、大きい
で終わらずに、詳しい話を聴けて勉強になった」、「湿
原の素晴らしさ、課題を知れて良かった」など、解説活
動を評価する声が多く寄せられている。

本活動においては、住民の視点で釧路湿原の魅力や現
状、自然再生の取組を伝えることで、観光客にとってよ
り親しみやすく、理解の促進が図られ、口コミ、SNSな
どの情報拡散による更なる観光需要の増加が期待される。
また、解説員自身においても、釧路湿原の魅力を再発見
することができ、環境保全への意識が高まるなどの側面
があり、まさに「共創」ならではの様々な取組効果が期
待されることから、今後も積極的に活動を進めていき
たい。一方で、解説員からは、細岡展望台へ向かうための
JRの不便さを訴える声や、展望台周辺の木々の枝払いを
求める意見なども上がっており、解説員にとってより良
い活動環境を提供できるよう、関係機関と連携し解決し
たい課題も残されている。

3. 課題解決に向けた取組

(1) 釧路湿原自然再生協議会の取組

2002年に自然再生推進法が公布されたことに基づき、
2003年11月に釧路湿原自然再生協議会（以下、協議会）
が発足し、釧路湿原の自然再生の取組が始まった。協議
会には、令和6年3月時点で個人76名、47団体、10関係行
政機関及び13のオブザーバーが構成員として登録し、令
和6年度までに7つの小委員会が作られ、各小委員会にお
いて多様な主体の構成員が参加のもと、具体的な事業に
ついて報告・議論が行われている。

7つの小委員会の1つ、地域づくり小委員会は、観光、
農業、漁業等の地域産業と連携した釧路湿原の「ワイズ
ユース」（賢明な利用）により、将来にわたり釧路湿原
を保全・再生するとともに、地域産業が豊かになる取組
を進めることを目的として、民・学・官連携により設立
された。地域づくり小委員会では、これまで、前述した
カヌーガイドラインの策定やサイクルツーリズムの取組
のほか、釧路湿原での熱気球係留フライトや釧路川と釧
路湿原を中心としたモニターツアー、農業事業者と連携
した自然再生見学会など、様々な主体による取組につい
て議論を重ねており²⁾、今後も積極的に釧路川の「かわ
たび」に関する情報共有を行い、課題について議論、検
討することで、解決が目指せると考えられる。

(2) 釧路川流域かわまちづくり計画

釧路開発建設部では、現在、釧路川流域市町村等との
連携による、水辺を活かした地域の賑わい創出を目指す
「かわまちづくり」計画策定を検討している。前述した
釧路川の「かわたび」に関する課題については、人的要

因によるものや環境的要因、金銭的要因によるものなど
様々であるが、今後、流域市町村等との議論を重ね、ま
ちづくりの課題も踏まえた、地域と一体となったハード・
ソフト両面による河川整備を通じて、釧路川「かわ
たび」の課題解決にも繋げていくことができると期待さ
れる。

4. 更なる「共創」を目指して

(1) 新たな選奨土木遺産 旧岩保木水門

大正9年に発生した大洪水を契機に建築が開始され、
昭和6年に完成した、釧路川と新釧路川を分流する役割
を持つ旧岩保木水門が、令和6年9月、釧路市街地や釧路
港の発展を支えた歴史的な土木構造物として、公益社団
法人土木学会の選奨土木遺産に認定された（写真-6）。

旧岩保木水門の直近にはカヌーポートが整備されてい
るほか、サイクルラックの設置なども行っていることか
ら、周辺自治体と共に旧岩保木水門の利活用を図ること
により、カヌーをはじめとした河川利用の魅力向上に繋
げるなど、地域連携による「かわたび」の盛り上げりを
図っていききたい。

(2) 釧路川「かわたび」から感じた思い

筆者は3年前、北海道開発局に入局した。入局前は、
個人的に幼少からサッカーをしていた経験から、全道の
河川敷にサッカーコートや公園など子どもの遊び場を整
備して、地域を活気づかせたいと、実際の実務内容も分
からず漠然と考えていた。しかし、「かわたび」を通じ
て地域住民と接する中、釧路湿原自然再生協議会で長く
活躍されている人物から、「日本で初のラムサール条約
登録となった釧路湿原の貴重な自然環境は、流域住民の
財産である。その財産を保全し、賢く利用し、地域全体
で共有し、将来へと伝えていくことが、今生きる我々の
責任である」という言葉を聞き、考えを改めた。



写真-6 旧岩保木水門

河川管理者として、地域の活性化や観光振興を図るからといって、一律に漫然とした取組を行うのではなく、地域実態や周辺環境、歴史的背景をしっかりと把握したうえで、地域住民に求められる、地域住民のための取組を、地域住民と共に推進していくことの重要性を強く感じさせられた。また、それこそが「共創」に繋がる第一歩だと感じている。

また、前述した「くしろ自然再生解説員」の中には、釧路湿原は自身のパワースポットであると話し、釧路市内から離れた細岡展望台へと足繁く通い、いつも明るく、活発に解説活動を行ってくれる方がいる。その方は周囲とも積極的にコミュニケーションを取りながら、その場所全体の雰囲気明るくする人物で、筆者も何度も和やかな気分になされた経験がある。「共創」による取組

強化を図るにあたっては、こうした高いモチベーションを維持する人物をキーマンとして、取組を進めていくことが重要と考えることから、当然筆者も高いモチベーションを維持しながら、地域住民との繋がりを大事にしていきたい。

更なる「共創」を目指して、今後も真に地域に必要な事業のあり方を模索し、積極的に地域と関わりを持ちながら、よりよい河川空間の賑わい創出に取り組んでいく。

参考文献

- 1) 「道東ホースタウンプロジェクト」HP：dotohorsetown.jp
- 2) 地域づくり小委員会 活動報告書：
<https://www.hkd.mlit.go.jp/ks/tisui/c86hsb0000005115-att/c86hsb000000510h.pdf>